

二〇二一年(令和四年)六月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十九卷第六号

村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)6月号

第99卷

第6号

通卷1098号



香蘭

2022年(令和4年)6月号
第99卷 第6号 通巻1098号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌 (82)
近詠十五首 第二歌集を出す
作 品

二 阿部容子 表二
一 飯島智恵子 2

推薦香蘭集

三 一

作品一 特選 (四月号) 伊藤 (美)・近藤 (光)・菅沼・高畠・手塚・西野

松田・満木・森田・宮原・吉澤

16 44 43 37 23 4

作品二、三特選 (四月号) 江口・高田・竹本・田中・中井・松沢・安田

山下・伊藤 (久)・田村・徳済

千々和久幸

村野次郎への旅 (146) 柏原陽子

一頁公論 (13) 出雲言葉のなかで 岩田明美

18

令和四年度 誌上全国大会詠草
エッセイ・自由研究 モーモーハイキングだより

柏原陽子

18

市川義和「のぶちやん」評 (四月号近詠十五首) 丸山・市川・関口 (洋)・澤田

岡野三枝子

18

七首抄 (四月号) 作品一 丸山・市川・関口 (洋)・澤田

岡野三枝子

18

作品二 西野・野房・江

河野慎二

18

作品三 中野・井房・江

田中あさひ

18

耳言あれこれ (7) 高畠・安達・犬山・柏原 (貞)

田中あさひ

18

明宝研究会第一二六回三月例会 短歌への遺言状 (回顧と展望) 千々和久幸

江

18

歌会及び会合・会員消息・他 和田表三

中村陽子「浮遊」 目次・緑地帯カット

82

編集後記・新宿日記 表紙絵

中村陽子「浮遊」 目次・緑地帯カット

82

声あげて幼な子が撒く豆のつぶ

春の豈に音はねかへる

これは先生最晩年の昭和53年、83歳の時の歌で『角筈』に掲載とともに、『村野次郎三百首』ではこの一首のみが昭和53年の歌として掲載されている。節分の微笑ましい情景が詠まれていって、好きな歌である。

上の句は幼な子が豆を撒く様子の描写である。この幼な子は村野先生の年齢からすると、曾孫さんかと思われる。「豆のつぶ」の語がリアルな感じに捉えられてとても生きている。

下の句も魅力的で、節分、立春、幼な子のイメージから「春の豈」も効いている。

そして豆が豈に当たって飛び散る様に「音はねかへる」と音に注目したことで、幼な子の動作や辺りの人達の声、手を叩く音までも聞こえてくる。幼な子やまわりの家族の温かい雰囲気も伝わってきて心惹かれる歌である。

難しい歌の詠めない私は「平易な表現」と言われる村野先生に光を頂いた思いである。

『角筈』

四選者の作品 品

病より癒えし日をもて振り仰ぐ白蓮二輪つぼみを解く
車窓よりお化け煙突かぞえし日 どこへ遠足にいったのだったか

欲 望 鎌倉 香山 静子

花見酒 平塚 千々和 久幸

真っ先に咲きしさくらは狸爺い
ことしまだ桜に会えり薄紅にひらけば遠き人の思わる

この月の誌面に載れる歌集評たしかめてよりさくら見に行く

職を辞す日に来て独り仰ぎたるさくらあまりに美しかりき

花見酒飲む馬鹿飲まぬバカ ともに言い分はあれさらばわが春

さくらさくらこののち幾たび見えんか余命さほどは残りておらず

明日もまた来るよさくらの花に告げコップに残る酒を飲み干す

病棟の妻もさくらを見てあらん夢と現を行き戻りして

ちがう、違う 横浜 渡辺 礼比子

どうしたらもつと軽やかに生きられる 机辺漂うクサカゲロウよ

何つけ「ちがう、ちがう」が口癖となりたる夫には「あら、そう」と言う

深更のラジオに聞けりかみ碎くごとくもの言う吉永小百合

退職の挨拶文を見せられて変換違いをひとつ指摘す

何せんと二階へ来たか記憶なしゴミふたつみつ拾いて降りる

蕗味噌をのせた白飯お代わりす何時しか術後ひと月経たり

名を持たぬ坂のよきかな緩やかに下りきたれば桃の花咲く

バラリンピックに金賞を得て抱き合へるウクライナの選手の哀しき瞳
罪のなき人等が山野を逃げ惑ふ戦に泣けるは常に弱者ぞ

平和なる世に甘えつ温々とわれら生きゆく当然のごと
幼き日防空壕に潜みつつ過ぎゆく敵機の音聞きゐたり

戦争とふ言葉ひびかぬ今世を危ぶみながら過ごすこの日々

人と人憎み合ふ世の終焉を切に願へり戦知る身は

人間の欲望とは限りなし平和なる世の来るはいつの日

なんきん豆 我孫子 丸山 三枝子

あらせいとう出荷を告げる映像の向こう太平洋がきらめく

なんとなくなんきん豆をつまむとき決まって夏の思い出がくる

アマゾンから届くかるいし、最高級天然軽石七百五十円

軽石は分厚く大きくすかすかで死ぬまで使うこのすかすかを

朝七時の窓を開ければプランターの青きアネモネ花かかけおり

手賀沼の河津桜をながめつつランチするなり河童に見られ

柏から手賀大橋を渡りきて橋の尽きればここから我孫子

作品一特選



(四月号作品から)

香山 静子 選

骨太の議員は日本におらぬのか胡麻化すような小物ばかりだ
・義侠心を持つ作者の意氣に拍手を送りたい。

異なる意見 川越 菅沼 はる子

膝といふパート一つが故障してわが全身にがたつきが来る
膝少し痛め立ち居の不自由もこの歳なれば自然のことよ
跛ひき歩けば友らが寄り添ひて手荷物みんな持ちてくれたり
自らの老いを認めて生きてます入歯を入れて補聴器つけて
ただ一つ生つたミカンをいつ揃ぐか家族三人の異なる意見
・素直に老いを認める作者に感心する。

冬 桜 川崎 伊藤 美恵子

しつけ糸付きたるままに遺されし母の半纏ざざんくわ模様
黒の地に赤の山茶花あざやかなり母の形見の綿入れ半纏

もつたいいないと母は着ざりき祖母おばばが嫁にと縫ひし綿入れ半纏
贈られし母も贈りし祖母も故人となりて半纏のこる
半纏をまとへば首にやはらかし黒別珍のねんねこ衿は
・祖母や母への思いやりが読者の胸を打つ。

わかれ 足利近藤光子

袴先に冬至の雪が貼りつきぬ八十路を重ねる幸の一つと
山よりの風向き朝に夕に変へ冬至の雪は猛りて暮るる

年明けの光穂しき宙を舞ふコロナもありやと夜の冴え仰ぐ
冷えし月しろじろ昇る稜線にコロナといふが窺ひ居るや
百八歳の姫身罷りおまいりす長寿錢など押し複雜
手順よく姫ばかりの味噌仕込み喧々諤々口は達者だ
三軒の葬儀におまいりすませたりコロナのご時世手みじかである
安倍のマスク在庫保管に何億円正しく使え民の税だぞ

舞ふ雪 伊達 手塚春世

袴先に冬至の雪が貼りつきぬ八十路を重ねる幸の一つと
山よりの風向き朝に夕に変へ冬至の雪は猛りて暮るる
年明けの光穂しき宙を舞ふコロナもありやと夜の冴え仰ぐ
冷えし月しろじろ昇る稜線にコロナといふが窺ひ居るや

凍らむとする池の面に寄る風がこれも仲間と雪片注ぐ

・北国の真冬の寒さに立ち向かう作者。

大 寒 に 東 京 西 野 美智代

退任のメルケルさんに一本の深紅の薔薇が捧げられたり
二親のトラスの役目果たし終へ子は独り身の優雅たのしむ
来世は紋白蝶に変はるやもプロッコリーを好めるわれは
長いながい沈思の末に十手余を残し投了の棋士のまなざし
大寒のバイクカバーにへばりつくでんでん虫は乾涸びて生く
・様々な角度から歌の素材を拾っている。

蟬 梅 川 崎 松 田 恭 子

手放さんとしては迷ひをり五十年保ちつづけし運転免許証
助手席に乗りみし母はもう居らず遠くも近くもひとりドライヴ
楽団員はマスクする人半々でコンダクターは顔で物言ふ
若からぬ指揮者乗る台意外と高く激しき動き大丈夫かしら
その辺の紙に書きつけし歌数首捨ててしまひしか名歌なりしが
・一首目、二首目の手放す運転免許証への切ない思いが印象的。

かぶらずし 川 越 满 木 好 美

厚切りの寒ブリ鮑たっぷりの母のかぶらずし絶品なりき
ふるさとの冬の厨は寒かりき指を沁みらせ漬けるかぶらずし
近ごろはもう食べられず馴染みたる母の自慢のかぶらずしはも
かぶらずしばたりと漬けぬ母なりき七年前に父逝きてのち

熱爛とともに食せば旨からん母のかぶらずし恋しかりけり

・かぶらずしの得意だったお母さんの切ない思い出。

コロナ禍 福岡 森 田 徹

コロナ禍に閉ざす心をさらにまだ閉させというか第6波猛る
つかの間の平穏さえも許さざるコロナ禍残生を賭けて生き抜け
青春の謳歌も激しき反抗もなきままわれは四年を病めり
世に甘えずすがるを拒みて八十七年諍いながら過ぎし年月
男らしさが俺の身上 ジェントルマンの意識はじめから無い
・コロナ禍と過ぎし年月への忘れ得ぬ思いが詠まれている。

世界を覗く 倉 敷 宮 原 迪 恵

冬陽あび庄家の塀の瓦よりそつと世界を覗くタンポポ
逝く年も来る年もなく二間川に白鷺のいて冬陽にまぶし
春はまず厨に來たり朝の陽とあさりの汁と木の芽のみどり
山鳩が庇に來ているコンニチワそろそろ春の目ざめるきざし
・冬から春の移ろいに心をときめかす作者。

正月過ぎて 所 沢 吉 澤 容 子

秋は去り冬の半ばの夕暮に里芋のコロッケ食卓にあり
霏霏と降る関東平野のかそけき雪籠もれる会津が眼裏に浮く
山茱萸は未だ咲かぬか臘梅の便りのありてなごむ老いの日
籠もりゐて遠き想ひに残る人良き人ばかり笑顔もいつぱい
・人の心に感謝しつゝ過ごす老いの日々を素直に読み込む。

作品一、三特選



死生観に向きあう一連。五首目は孤独の味わいが深い。

(四月号作品から)

渡辺 礼比子 選

長 寿 千葉 竹本 幸子

千葉 竹本 幸子

〈作品二〉

二本の苗木

柏 江口 紗代

洋梨とぶどうの苗木を二本植え実り待たずに夫は去りにきことさらに大事な夫と思うまじ暮らしの日々の薄明かり持つ羊羹を食べている時影が来る俺はここだよと夫の気配が夫は今失せたる里に休めるか草食む山羊に姿を変えてたましいは中山競馬に急ぎしか夫逝きし日の馬券が残るきっと夫は中山競馬の観衆の中にただよう魂になる現し世のそここを夫の影が過る。さりげない詠み口ながら哀感深い挽歌。

記 憶

鎌倉 高田 みちゑ

ふる里といふ柵は何ならん捨てし子孫は異郷に果つるを「君が大学出る時は」言ひさして止むもう我はこの世に在らず消去してなほ残るものあるならば子らの記憶に住みゐる私落蟬の天を睨みて静かなり命終へむとわがベランダに来て落果拾ひ落葉集めてコロナ禍の老いはひとりの遊びに長けぬ

約束をしたかのごとく叔母ふたり天に召されぬ寒のさなかにコロナ下に看取られるなく逝きし叔母十日を過ぎて通夜を迎えた葬の礼状にそえたるポチ袋「長寿」と書かれ五百円あり雪道ですってんころり仰向けの亀のごとしよ暫し動けず災害は思わぬ形で襲い来る海底火山に思い至らず

・コロナ下の葬送と、昔ながらの風習の捨てがたさを対照的に描く。

どんぐり 取手田中あさひ

革靴に僧衣のをどこも吐き出して山手線はおもむろに発つちさき手にひしと握られどんぐりの幾つは何に躰らむある日夕闇の空にあらはれ出でたるは昼のあひだを旨寝^{うまい寝}せし月旨寝より覚めたる半月のかたはらにまたきやまぬ従者の金星耕して生りたるもので暮らしたいこの世にたつたふたりでひそと空に近きもの見るきみと地に近きもの見るわれとこの世の川べ

・一首目の下句のつけ方、二首目の奔放な想像力に舌を巻いた。

慰労の電飾

宇治中井房江

コロナ禍に一人キヤンプが人気とう難民キヤンプの密を思えり赤十字マーク囲んで（ありがとう）医療従事者慰労の電飾逆縁の喪中はがきの届きたる夕べ一入冷えまさりたり訪い来れば「昨日は誰とも話さなかつた」一人暮らしの人の言いたり二年ぶりに帰省の息子「瘦せたかあ」返事を待つという風もなく

タベしづかに暮れゆくならず空家にてボヤ騒ぎありサイレン止まず
・対象に率直に向き合う姿勢に共感した。五首目は下句の屈折がいい。

犬アレルギー　　さいたま　　松沢みどり

腰痛は体重増加が原因とわかつておやつを食べる
するめとチツツは一緒に食べるとおいしいと思う疲れた目をこすりつつ

PTAの仕事をすればパソコンを使える人として喜ばれ
暖房のない会議室で作業するホットコーヒーとつくに冷めて
広報誌のレイアウト作業そそくさと済ませて午後から仕事へ向かう
リビングで犬と遊んでくしゃみする夫も私も犬アレルギー
・エネルギー不足な日常に壮年女性の生の哀感が覗く。

腹の虫　　行田安恵子

わが腕の賞味期限の切れし血を吸つて元気な霜月の蚊よ
冬畠にむくりむくりと肩を出し葉かけに白き大根の肌
白足袋が庫裡へと急ぐ在りし日の大黒の影　菩提寺は秋
勢いてセリフ覚えずとびのつた舞台のごとし後妻となるは
送つてと言えぬこの日の腹の虫虫が歩かず駅までの道
幾年もともに暮らせど折折にふたり入りし炬燵がぬるい
・写生、諧謔などの表現に、手垢のつかない魅力がある。

新年　　横浜山下紘正

喜寿の過ぎ「生きることは」を思ひてよき一日を過ごすこととす
老いしいまとにかく幸せ気分にて青春の気負ひなきは自由よ
死の時は隠されしまま老い人は未来を生きる自由を有す

初日浴びけやき並木は枝先までシルエットとなり空を支へる
六階から眺むる雪は時折に迷ひ子のごとペランダに舞ふ
・様々な喜怒哀楽を経て、遊行期の作者の到達した樂觀主義。

〔作品三〕

老犬ホーム　千葉伊藤久美子

羽ばたかず漂いながら生きるのさトンビは言えり弧を描きつ
どれくらい痛みを感じているのだろう雲がちぎれて離れゆく時
温かいけれども切ない響きあり駅裏の看板「老犬ホーム」
夜の窓に映る私はサイボーグみたいに街の明かりにとける
・首目ののびやかなうたい口、二首目の斬新な発想に惹かれた。

歌　　東京田村久美子

大きいなる讃歌をみづから謳ふごと枯葉舞ひ落つ光の中に
柔らかな蒼き光のあたたかし満月は今宵町を包めり
空よりの悲しひほろり一瞬の雪の舞ひたり師走の町に
招福の札を下げるたる破魔矢ひとつほつねんとあり小部屋の隅に
・情景描写を通して作者独自の美意識を表現しようとする意欲作。

終電の灯り　　柏徳潤育子

マスクして牌かき回すそれぞの手はそれなりの歳を隠せず
彼方なるビル街の灯よ　眼下には今し過ぎゆく終電の灯り
止めたきに今年も届く年賀状少し遅れて返信を書く
さくさくと噛める歯のあり感謝してこれぞ長寿の秘訣なるかも
・題材の取り方は大胆でありますながら、微量の毒の効いた歌。

リビングの窓から見える庭先に仲間を殖やし福寿草咲く

「祭り」とう名のつくものはことごとくコロナが攫つて三年が過ぐ

こもり居の日中の電話 登喜さんから歌集を出すようすすめられたり

「手伝つてあげるよ」登喜さんの手助けを頼みに歌集の準備をせんか

第一歌集を出したる後の十四年歌の数には不足のあらぬ

「歌の数は四百五十首前後に」と頼みの綱の千々和代表

^{とし}年齢でなく心意気だと自らを諭し励まし選歌を始む

凡作も駄作もわれの分身と思えど捨てる きつと眉あげ

ことばを添えことばを削り苦しむも楽しい作業をつづけてきたり

出す ださぬ 心の揺れのおさまらぬときもありしよ歌集を編むと

「良い歌集にしましようきつと」折にふれ励ましくれし代表と友

第二歌集を出す

飯島智恵子

ひと言隨想

第二歌集を出すということ

八十代も半ばに入り、歌集を出すなど思つてもみませんでしたが、ある時、歌友の高橋登喜さんから電話があり、「第一歌集を何故出さないの。飯島さんの歌が私は好きなのに……」と告げられ、驚きと嬉しさで一杯になりました。私の歌を好きと正面きつて言われたのは初めてでした。その上に、出版までの手伝いを引き受け下さること。願つてもないご好意に甘えることにしました。

いざ歌集を出すことに決めたものの、コロナや病気になつたらどうしよう、お互に高齢の身ゆえ、不安材料には事欠かない日々でした。とにかく「体が第一、絶対無理をしないこと」を合言葉に進めてきました。

ワープロに堪能な高橋さんと千々和代表の迅速なご指導のもと、出版に漕ぎつけました。歌集名『草木瓜の咲く家』通りに今年も木瓜の花が咲いて庭に華やぎを添えています。

行き戻り重ねてようようまとまりぬレター・パックをかかえて急ぐ香蘭叢書二六〇篇なるわが歌集『草木瓜の咲く家』ひたに待たるる二人子と二冊の歌集をなしたことわが人生の精華と言わんまだ八十もう八十を折折に使い分けきて今日の日がある

大正期の「香蘭」（七）

前号に引き続き「香蘭」の第四巻第三号（大正十五年三月）を読んでいる。本稿で読者の多い「前月歌壇月評」から見て行こう。

本号の評者は橋本敏夫、矢代東村、橋本政一、村野次郎である。

・七面鳥ふたたびなかず大きなわが家のけ
はひただにしづけし（日光） 吉植庄亮

敏夫 「七面鳥ふたたびなかず」秀抜な表現で

ある。心にくい程云ひ得てゐる。對象に對する作者の情感は此二句の中に豊かに溢れてゐる。然るに、それにひきかへて「大きなるわが家のけはひ」は何と云ふ空隙の多い、低調な表現であらう。之れは「大きなる」と云ふ漢とした原級の使用法と「けはひ」なる思はせ振りな言葉が、「わが家」と云ふ断りの言葉の前後を挟むで、調子を白けさせてゐる爲であらう。大まかに響き得べくして響き得ずに

この歌、感じは出てゐるが、上句聊か作意のあとがある。

千々和 久 幸

終つてしまつたのである。「七面鳥ふたたびなかず」「ただにしづけし」の様にすつきりと歌ひ上げて欲しいのである。

東村 ある感じは出でゐる。難をいへば、ふたたびなかず、これは作者の技巧のある所だらうが、キザな氣がしないでもない。それか

らわが家のけはひだけはいの使ひ方もこれでいいかどうか、一つ諸君の意見をききたい。

次郎 相變はらず樂に歌つてゐるが、要領は

得てゐる、しかし「日光」のこの一聯は吉植氏としては、ほんの餘力であり、片鱗を見せにすぎない。兎角の評はあつても橄欖一月號權太行二百五十首は大したものである。「日光」に餘りものや、間に合せを載せてはいけない。

政一 評つて、「後備兵われも」と兵隊生活

を屢々歌ひ送つた氏の作であつてみれば、兵隊の動作を目撃しながら感興自ら湧いたであらうと、作者の心境に思ひ到つて心を曳かれらる作である。只、三句の「山川に」が、山の川にとか渓川とかにせなくては無理ではある

まいかと思ふが如何。

次郎 どうも會心の作でないこと、半田氏自身も承知と思ふ。或る微妙な感じを出さうと

・兵隊が庭作りすと山川に石をひろふはおも
しきかも（國民文學） 半田良平

敏夫 歌柄はしつかりしてゐるし、表現の大まかな處も如何にも氏の面目を備へてはゐるが、此様な即興的な歌は矢張り即興に過ぎなく、重い責任を負はしめるのは無理であらう。

東村 「そんなもの捨てて何にするんですか」「いや庭を作つうともひましてね」といふ様な會話の後に、この歌が出來たものと思ふが、つまり兵隊が庭を作るといふ事の方に興味があつたのだらぶが、これでは石を捨つてゐる

方に興味がある様になる。どつちにしても大ざつぱな歌ひ方で、讀む者にはさうおもしろくない。

政一 評つて、「後備兵われも」と兵隊生活を屢々歌ひ送つた氏の作であつてみれば、兵隊の動作を目撃しながら感興自ら湧いたであらうと、作者の心境に思ひ到つて心を曳かれらる作である。只、三句の「山川に」が、山の川にとか渓川とかにせなくては無理ではある

して、出しそこねた形である。私はこれより「山川の淺きに下りて兵隊があげたる石かいまだ濕れる」に氏の眞の姿を見るのである。

・柱時計ここに焼けけむ歯ぐるまのさびはて居るを蹠とばしにけり（アララギ）

斎藤茂吉

敏夫 取材と情感とがぴつたりとしてゐると思ふ。第一第二の句説明の様であるが、「けむ」と思ひ切つて突放した處一脈の情感を通はせてゐる。「さびはて居るを」私は之句にもつと餘情が籠つてもいゝと思ふ。柱時計の「歯ぐるまのさびはて居るを」見付けた事が作者に之歌を要求した第一因だからである。「蹠とばしにけり」と云ひ切つた處如何にも斎藤氏らしく、焼跡に立つて回想した感懷の溢れを感じ得する事が出来る。

然し私の心には何とはない物足りなさがある。私は斎藤氏からもつと大きな或物を希待していゝと思ふから。

東村 「蹠とばしにけり」はよく出でゐる。感慨無量。

政一 斎藤氏の特性の豊かに滲み出でた歌をして味ふべきである。感動の實想を推し進め

て詠ひ放つた手腕の凡ならざること。氏近來の作風を云々する輕卒者へのよき啓示であらう。強ひて難を言へば、三句の「歯ぐるまの」

のが調子を聊か弱めてはゐいかと思ふ。

次郎 私は一聯の中特にこの一首に心をひかれる。斎藤氏其のものをこの一首にまさまさ

と見ることが出来るからである。「さびはて居る」は中々出て来ない語である。感情の生々しさがあつていい。蹠とばしにけりで追従者を一氣に振ひ落してゐる。氏以外の人には一寸出來ない歌である。

・初春の十日まりの月あたたかう砂はま道に松のかげおく（心の花） 佐々木信綱

敏夫 名譽な佐々木博士の歌として之れは全く困ると思ふ。初學者が歌ことばを拾ひ並べた様な歌であるといつてしまつたら、もうそれでお詫びになるであらう。

東村 「かけおく」が面白いぢやないか。歌もこの程度のものだよさう。あとは諸君に今月ぬいた歌の中では、茂吉氏のがよかつた。次に庄亮君のが好きだ。

政一 窺はれた境地は感得出来るが、この一

首は平面描寫に終つて感服出来ない。リズムの上からも、上、一二句の連接から窮屈な感じがしてすらりと胸に響いて來ない。

次郎 今時の人は「かけおく」位の程度では我慢が出来まい。上句下句の續き具合がどうも的確でないやうである。これが一首の原象を稀薄にしてゐるのらしい。

「前月歌壇月評」にはこのほかに越前翠村（創作）、桐田露村（霸王樹）作品も採り上げられていたが割愛した。以前にも書いたが厳しくも忌憚のない意見が多く、この欄は他結構に注目されたことだろう。村野先生はそれぞれの意見を開き分け、大所高所から作品の到達点を提示されている。

誌面は作品欄、月評欄のほか論考、エッセイの類いも多く橋本敏夫「象徵道」、橋本政一「橘井堂雜筆」、清原齊「歌集『立春』を評す」、本間樂寛「香蘭の歩み來し道」など多彩な構成になつてゐる。

六號雜記（本間樂寛）には「よく先生は香蘭は駄目だ、一番怠けてゐる。なぜもつと眞剣にやらぬ」と窘められるという白秋の言葉が紹介されている。